

生活科

山 岸 留 美

中 村 良 恵

1 生活科における聞き合いの活動

*¹気付き

対象に対する一人一人の認識であり、児童の主體的な活動によって生まれるものである。そこには知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれる。

『小学校学習指導要領解説 生活編』平成20年8月文部科学省 p4 より引用

*²気付きの質の高まり

無自覚なものから自覚された気付きへ、一つ一つの気付きから関連付けられた気付きへと質的に高まっていくこと。

『小学校学習指導要領解説 生活編』平成20年8月文部科学省 p11 より引用

生活科の基盤は、自分と身近な人々や社会、自然とかかわる様々な活動や体験である。対象である「ひと・もの・こと」に夢中になってかかわる活動の中で、実感を伴ったその子なりの思いや願いが生まれる。活動を繰り返す過程で対象とのかかわりが深まりその思いや願いは強まる。そして試行錯誤しながら気付き*¹を生み出していくことができる。

このように体験が重視される生活科において、書くことや自分の気付きを友達と交流することで気付きの明確化を促す。子どもが友達の気付きを聞いたとき、問い（なぜ、どうして？）や納得（へえ、なるほど）、好奇心（どきどきわくわく）、共感（そうそう）などが生まれ、次の活動が誘発される。これらを生活科での聞き合いの活動ととらえ、この活動が積み重なることで気付きの質が高まる*²。

そこで、生活科における聞き合いの活動では、めざす子どもの姿として次の二つをあげる。一つ目は具体的な活動・体験と言葉をつなぎ合わせ、友達と交流することで体験したイメージを様々に結びつけ、自分の気付きを見直す姿。二つ目は、交流やふりかえりから自分の気付きを基に新たな気付きを生み出し、友達のよさや自己の成長に気付く姿である。

よって、「生活科における聞き合いの活動」を以下のように設定した。

「ひと・もの・こと」に向き合い 実感を伴った気付きを 友達と共有するなかで見直し さらに対象にかかわろうとする活動

2 聞き合いの活動とステージ

生活科における聞き合いの活動は、

・気付きを共有する ・視点を見つける ・よさを見つめ直す

以上の三つをステージ（働き）として挙げる。

(1) D（である）ステージ～気付きを共有する～

対象である「ひと・もの・こと」にかかわり得られた気付きは、学級やグループの中で友達と共有し自分以外の気付きに触れることで見直され、対象への認識が広がる。そのような聞き合いが生まれるには、対象に繰り返しかかわることができる体験の中で、試行錯誤しながら五感を働かせて違いや変化をとらえ、面白さや不思議さを実感できる活動が必要である。

(2) T（つながる）ステージ～解決の視点を見つける～

解決の視点とは、活動のポイントや工夫などである。学級やグループの中で解決の必要な課題が生まれ、今までの体験や経験から得られた知識の比較・分類、関係付けを行う聞き合いのなかで、解決の視点を見つけることができる。また、活動のポイントや工夫以外にも材料や表現方法を選択する手がかりが生まれると考える。いくつかの視点で事象をとらえることで気付きの質が高まる。

(3) U (うまれる) ステージ～よさを見つめ直す～

交流や活動のふりかえりで「見つける」「比べる」「たとえる」などの多様な学習活動を行うことで、自分の気付きを見つめ直し、自分の成長や友達のよさを感じ取ることができる。さらに、自分なりの疑問が生まれさらに調べたくなり、もっと他の対象にも興味が広がるなど発展していく活動に繋がる。

3 聞き合いの活動のための手だて

先に述べた三つのステージにおいて、有効と思われる手だてを次のように考えた。

(1) 伝え合う必要感のある学習活動

共通体験
多様な思い

協調的・共同的な
かわり

子ども同士が交流する前に、まず子ども自身が対象である「ひと・もの・こと」にどれだけかかわり、どんな思いや願いを持てたかが重要である。これまでに獲得された知識（経験知・感性）は子どもによって違いがある。子どもの学習意欲を掘り起こす意味で、興味が持続し全員が気付きをもてるような共通体験をさせる。そこで多様な思いが生まれることによって、伝え合う必要感が起こり聞き合いにつながる。

また、異学年交流など子ども相互の協調的・共同的なかわりが生まれる場を設定することで、安心して伝え合う場となり、子どもは他者の話を聞く必要感を持つことができる。

(2) 共通点・相違点に気付く比較

友達とのかかわりを通して自分の気付きを確かにするためには、互いに話を聞き、共通点や相違点に気付くことが大切である。自分が話すことで満足してしまう子どもも、聞く際に自分との共通点や相違点を意識させることによって、「どうしてだろう。」「もっと聞いてみたい。」と相手の話に興味が起こり、理解しようとする態度が生まれる。そうして自分と友達との気付きをつなげる聞き合いが生まれ、自分の気付きを見つめ直すことができる。

その際、子どもの気付きは、体験や事実をもとに生まれるが、はっきりと自覚していないものが少なくない。交流する際に、対象となる実際の具体物やそれに変わるものを用いることで、気付きが明確になり伝わりやすくなる。

(3) 思いや願い、気付きの可視化

書く活動

板書や掲示

思いや願い、気付きを伝え合うには、目的意識や相手意識が欠かせない。誰に・何のために・何を伝えたいのか、活動のめあてやポイントが子どもに意識付けられるよう書く活動を取り入れ、相手にとって分かりやすい表現を目指す。

書く活動は、思考と表現の行き来によって思考を促す重要な活動である。そのために書くねらい・内容・方法が明確になるような教材を用意する。

また、子どもから表出された気付きを板書や掲示に価値付けることで、あいまいな気付きが明確になり意識化される。板書や掲示に、子どもの思いや願いに沿った課題や学習の見通しを表すことで、子ども同士が必要感を持って聞き合いをすすめることができる。

(4) 活動と交流を繰り返す場の設定

交流する場と
活動する場

生活科では、繰り返し活動をすることで気付きが生まれる。ただ繰り返すのではなく活動の後に気付きを交流する場を設定することで、気付きを共有する。交流後さらに活動の場を設けることによって、子どもが自分や友達の気付きを活動に生かし試しながら、実感を伴った気付きをもつことができる。このように活動後の交流が聞き合いにつながり、これらの過程の中で気付きの質が高まると考える。

4 実践例

(1) 伝え合う必要感のある学習活動

2年生単元名「1年生となかよし」の実践では、次の二つの活動を自分たちで企画・運営することを通して、1年生に喜んでもらう集会を実現するためのTステージの聞き合いに迫った。その活動とは、実行委員が中心になって行った「ようこそ1年生集会」とグループ毎に1年生を案内した「学校探検」(写真1)である。4月、2年生は入学した1年生をお兄さんお姉さんとしてお世話したい、早く1年生が学校を好きになってほしいという思いや願いを持った。よって、これらの活動は目的意識や相手意識を持ちやすく、主体的な活動の中に友達と伝え合う必要感のある聞き合いが生まれると考えた。

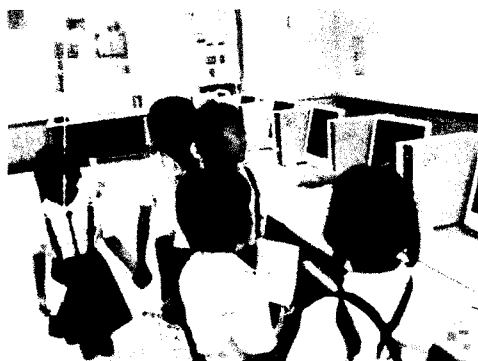
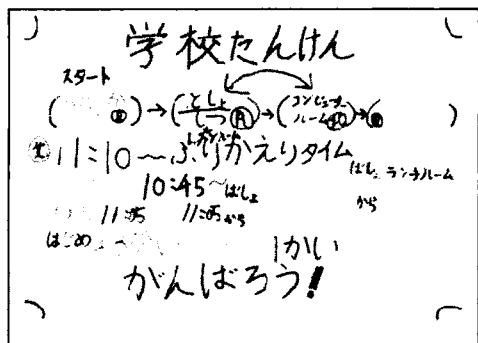


写真1 伝え合う必要感のある学校探検



資料1 グループ毎に考えたコース

まず自分たちが1年前にしてもらったことを想起しながら、めあてや1年生にしてあげたい内容など意見を出し合った。しかし自分たちだけではまだまだ経験不足で何をどのように進めたらいいのかわからない。そこで「ようこそ1年生集会」に関しては、実行委員を中心に、教師の指導のもと、学級で話し合う内容や仕事分担等について話し合った。クラスで学校のルールについて話すことになり、各グループに分かれ廊下の歩き方やバス停でのマナーなど、クイズや劇を取り入れながら工夫し、発表した。この活動では、何をどのように決めて進めるのかなど、グループでの話し合う経験を積み重ねることができた。

「学校探検」では、1年生に「どこの教室(場所)に行きたいですか。」「好きな教室はありますか。」などインタビューをし、1年生の要望をリサーチすることから始めた。さっそくインタビューをもとに、グループ3人が学校探検で案内するコース(資料1)を考えた。1年生の多くから「あまりよくわからない。」という答えが返ってきたことで「コンピュータ教室は、まだ行ったことがないと思うよ。」「理科室にはいろんなものがあるし、喜んでくれると思う。」と1年生の気持ちに寄り添ってコースを考えていた。「順番は、

まずランチルームに近い理科室から行こう。」「そうだね。1階から2階、3階と上がっていくといいね。」と順番を考える様子や「音楽室で、どんな話をしたらいいかな。」「楽器の名前や勝手に触らないなどの注意を言ったらどう。」と教室での説明内容を検討する様子があった。

4月当初、グループでの話し合いは自分の思いを伝えるだけで、なかなか話がまとまらず教師にたよる姿がほとんどであった。しかし「ようこそ1年生集会」で行ったいろいろなルールをグループ毎に発表したときの経験が生かされ、誰が何を言うのかなど話す内容や分担、自分たちでの練習と本番までの見通しを持って聞き合う姿に成長していた。学校探検のコースなど計画が1年生にも分かるようにポスターを書きたいと、必要感がともなうことによって主体的に動く姿も多く見られた。

グループでの協同的な活動は、自分の思いを友達に伝え、友達の話聞く場が自然と生まれる。学校探検の本番では、案内が一通り終わって帰ってきた際、教師が促す前に自分たちで円になり1年生と感想を伝え合う姿が見られた。全体のふりかえりでは「1年生が一生懸命聞いてくれてうれしかった。」と話す2年生の中で「初めて放送室の中まで見ることができて楽しかった。」と改めて学校探検の面白さに気付く子どもや「友達とがんばって準備できてよかった。」とグループの協力のよさを感じる子どもがいた。この実践から、伝え合う必要感のある活動を行うことは聞き合いにとって有効であるといえる。

(2) 共通点・相違点に気付く比較

2年生単元名「平和町をたんけんしよう」において、見つけたものを付箋で表しグループ毎にボードに貼る作業を通して町の様子に気付く、Dステージの聞き合いに迫った。

町探検は、子どもにとって自分の知らない場所の「ひと・もの・こと」を発見する楽しさがあり、子どもは見つけたものをみんなに教えたいという思いや願いを持つ。平和町を1回目に探検した後、青い付箋を使い、見つけたものを1枚ずつ書き出した。グループ交流の際(写真2)、紹介しながらボードにその付箋を貼っていった。自分と同じものがあるとわかると、付箋を近づけて貼る子どもや重ねて貼る子どもの姿を見ることができた。付箋を貼る作業により、見つけたものを操作しながら話すことで聞き手の注意を引きつけやすくなり、聞き手は熱心に友達の話の聞こうとする姿が見られた。「それは僕と同じだな。」「私の見つけたものと違う。」と自分の見つけたものと比較しながら、お互いの気付きを聞くことができた様子から、付箋を使った交流は聞き合いに有効であったといえる。「木の蜜が出ているところがあったんだね。見てみたいな。」「〇〇さんみたいに数を数えるとおもしろそう。マンションを数えたいな。」など、比較することで友達の見つけたものを自分に取り入れ、今度の町探検では前回見つけられなかったものを見つけないという意欲付けにもつながった。

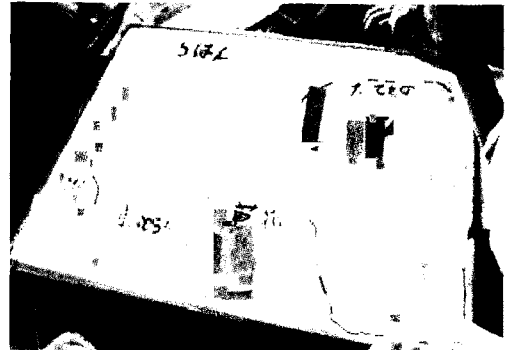


写真2 ボードに付箋をはる様子

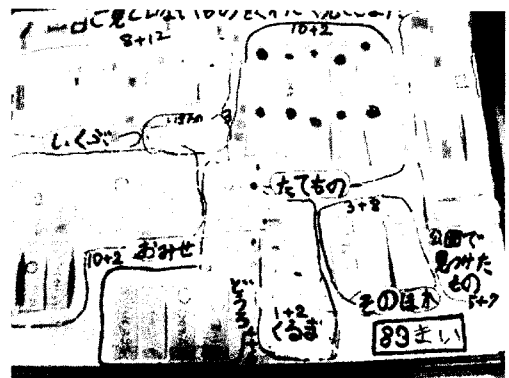


写真3 付箋による仲間分け

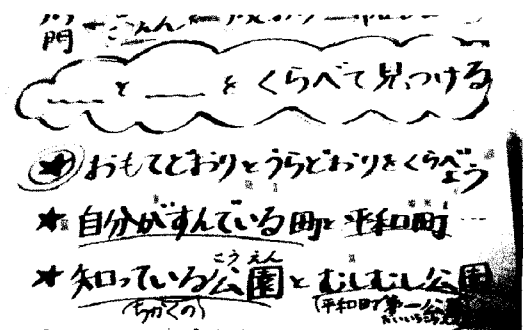
また、ボードに貼ったグループの付箋をもう一度貼り直し仲間分けさせた(写真3)。「これは、植物のなかまだ。公園で見つけたものはここに集めようよ。」と自分たちで分類しながら名称をボードに書き込む姿があった。それぞれのグループがボードを掲げ前に出て見つけたものを発表する中に「平和町は、お店や建物が多い。」「花や木の植物が多くて自然がいっぱいの町だと思う。」など全体をながめ、平和町の様子について自分の気付きを入れて話す子どもが見られた。2回目の探検後でのグループ交流では、付箋の色を黄色に変えることで、後からボードを見たときに1回目と比べて、前にあまり見つけられなかったお店や建物の付箋がたくさん増えたという実感を持つことができた。

このように、付箋を使った仲間分けは、全体の様子を話し合う際、発表するときの根拠として表すことができたこと、比較することで友達の視点を取り入れ新しい気付きが増えたという実感が持てたことから、聞き合いに生きる手だてであった。

(3) 思いや願い、気付きを可視化する

引き続き、「平和町をたんけんしよう」の単元において、たくさんの付箋の中から自分のおすすめの場所やものを選んで、カードに絵と言葉で表す活動を行った。それをグループで交流しながら地図上に貼り付けていくことで、新たな視点に気付くTステージの聞き合いをめざした。

1回目の町探検後に話し合った比べる観点(資料2)から、「表通りと裏通りを比べよう」という課題を意識



資料2 3つの観点でくらべる

させ、各グループで取り組んだ活動であった。

実際にはおすすめカードを地図に貼る活動が主となり（写真4）、課題に対する一人一人の意識は薄く、課題と子どもの思いとの間にずれがあった。その後、各グループの地図をあらためて見比べることで表通りと裏通りの違いをワークシートに表し、お互いの意見を友達と自由に交流する時間を確保した。公園まで行くのに表通りは遠かったと距離について書く子どもに、課題の難しさを感じたが、交流後の発表では人の多さが話題にのぼり、お店や病院があるからだと自分の考えを地図や他の考えと関連させて話す子どもの姿から、カードを地図に位置付けることは聞き合いに有効であったといえる。



写真4 おすすめカードを貼り付けた地図

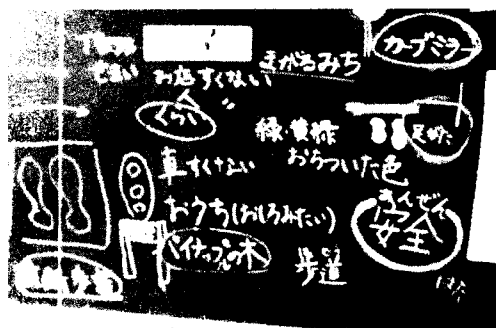
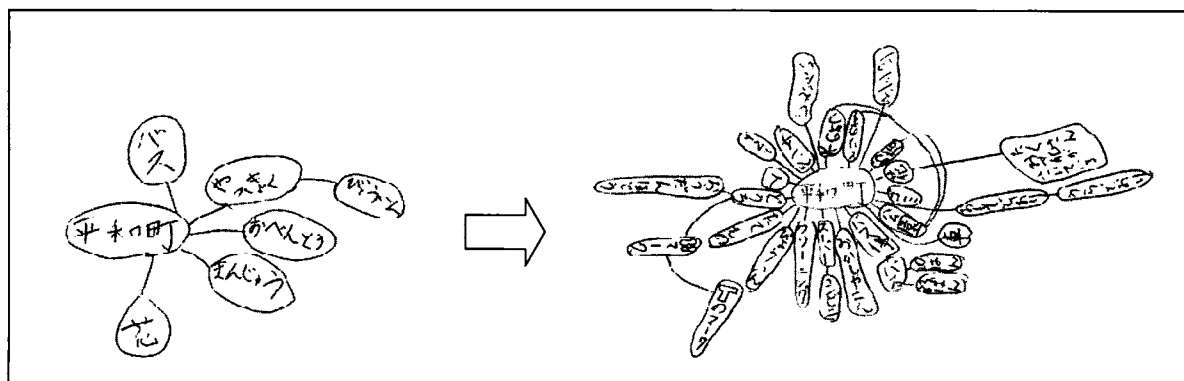


写真5 新たな視点(安全)が見えた板書

次時に話し合いがつながり、車の多さや道路の広さ・交差点の話題となった。T字路やカーブミラーなどについて話す子どもに「気がつかなかった。今度見てみたい。」という言葉が返っていた。板書（写真5）にあるように横断歩道や足型など安全にかかわる新たな視点に気付くことができた。「平和町で一番多いお店は何かな？」という新たな疑問も生まれ、3回目の町探検に繋がる聞き合いとなった。視点を新たに見つけるTステージの聞き合いが子どものイメージを広げることになった。それは、下のイメージマップ（資料3）からも、ただ項目が増えただけではなく、関連してとらえていることがわかる。



資料3 聞き合いを通して広がった平和町のイメージ

(4) 活動と交流を繰り返す場の設定

1年生「はるとなかよし」の単元では、春の草花を通して工夫した遊びの楽しさや春のよさを実感するために、活動の場、交流の場、そして活動の場と繰り返すことによるDステージの聞き合いをめざした。

子どもがそれぞれに草遊びをする中に、シロツメクサやタンポポで遊ぶ姿をよく見ることができたが、オオバコで遊ぶ姿はなかった。オオバコ相撲は身近な場所に生えている草で、だれもが楽しめる遊びである。教師が紹介した際、一部が反応したことから、数人の子どもはオオバコを知っているようであった。

まず、オオバコの特徴についてくわしく話さず、自分たちでオオバコを見つける場を設定した。初めは他の草を持って来るなど様々な草の中からオオバコをさがし出すのは大変そうだったが友達に聞いて見つける姿もあった。そこで、オオバコはどんな草なのかを交流する場を設

定した。すると「お皿みたいに丸っぽい葉っぱだよ。」「葉っぱに線がたくさんあるよ。」など葉の特徴について話す中で、実物のオオバコを持ってきてみんなに見せながら話す子どもが出てきた。先ほどの言葉と実際の特徴が結びつき、理解することができた（資料4）。この後でもう一度、オオバコ見つけをして「温室の近くにあるよ。」「2年生の畑のそばにもあったよ。」「三つ子山にもあったよ。」と交流の前には見つけられなかった子どもがオオバコを見つけれられるようになった。

このように、オオバコを見つける活動の後、オオバコはどんな草か交流する場で気づきを共有し、さらにオオバコを見つける場を設定することで友達の気づきを生かして全員が見つかることができた。この後、オオバコ相撲に強いオオバコを見つけようと子どもがさらに対象にかかわり、交流での聞き合いから気づきの質が高まっていった。活動と交流を繰り返す場の設定は、聞き合いにとって有効な手だてだといえる。

T:オオバコってどんな草なのかな？
 C1:お皿みたいに丸っぽい葉っぱだよ。
 C2:葉っぱに線がたくさんあるよ。
 C3:線ってどんな？
 C2:こんな（手を縦に動作して見せて）線。
 C2:(オオバコを持ってきて)これのことだよ。
 C全:ああ。わかったよ。
 T:葉っぱの他のことでもいいよ。こんなのが
 あったら、オオバコだよってわかるものな
 いかな？
 C4:葉っぱじゃないけど、粒々がついているよ。
 TC:粒々？
 C4:お米みたいにたくさんついていたよ。
 C全:本当だ。粒々がついている。

資料4 言葉と実際の特徴を結び付ける

5 成果と課題

(1) 伝え合う必要感のある学習活動

1年生との交流は、目的意識や相手意識を持ちやすく伝え合う必要感が得られる学習活動である。子どもは思いや願いを持って集会に臨み、達成感を持った。

しかし、主体的に企画運営をさせるといっても教師側が場を用意したものであり、子どもが自分たちで思いを実現するまでにはまだまだ経験が必要である。グループで聞き合う中に埋もれてしまう子どもにも一人一人目を配ることが大切である。また、話す内容や話し方のレベルアップを目指して丁寧な指導し、聞き合いの力を育てていかなければならない。

(2) 共通点・相違点に気付く比較

付箋を使っての気づきの交流は、音声表現だけでは聞き取れない子どもが多い低学年にとって、操作しながら話すことは、話し手聞き手にとって内容が明確になることから、仲間わけし比較して考えやすいという面で有効だったと考える。

ただ、作業を入れることで作業すること自体が楽しくなり伝え合う目的を忘れてしまうこともあり、課題意識の持たせ方が重要になると考える。

(3) 思いや願い、気づきの可視化

今回は、おすすめカードを位置づけた地図を見合うことで聞き合いが生まれ、安全の視点が自覚できたことは成果と考える。地図へ気づきを表すことがきっかけで聞き合いが生まれたことから、可視化は聞き合いにとって有効な手だてであるといえる。

いかに子どもの思いや願いに沿った課題を提示し、子どもの発言を価値付け、そして見通しを持たせられるかが聞き合いには大切である。有効な板書や掲示の工夫について模索していく。

(4) 活動と交流を繰り返す場の設定

活動の場、交流の場・・・と繰り返すことにより、子どもの気づきが互いに共有され全員がオオバコを見つけれられるようになったことは成果があったといえる。気づきの質が高まるとはどんな姿なのかを具体的にイメージすることで聞き合いのための有効な場の設定を工夫できると考える。